

2015年版

## 規格対応マニュアルへの

## 移行のポイント(一例)と事例紹介

すでに2015年版への移行を完了されたお客様もいらっしゃるかと思いますが、これからご準備されるお客様へのご参考として、今号では、2015年版規格対応マニュアルへの移行のポイントについて取り上げます。また、事例紹介として、昨年10月に移行審査を終えられた山田建設株式会社様も合わせてご紹介いたします。移行準備にお役立ていただければ幸いです。(編集部)

特集

1

## 2015年版規格対応マニュアルへの移行のポイント

三村 聡

## 1. 2015年版の特徴

2015年版改訂のポイントは2つあると思っています。ひとつは、マネジメントシステムという考え方をさらに広げ、品質、環境や労働安全などすべてのマネジメントシステムを共通の仕組みにまとめていく、という発想になったことでしょう。規格の構成も、PDCAサイクルに合わせてすべての規格が『統合化』されるようになっています。

もうひとつは、全ての業種が使いやすいよう、要求事項が『汎用化』されたことでしょう。特にISO9001の場合、これまで従来製造業を中心とした内容から、サービス業などでも利用できるように改訂されてきましたが、プロセスの妥当性確認、設計・開発など、製造業以外ではイメージしにくい項目が多数あり、解釈等もバ

ラバラになっている傾向がありました。2015年版では、サービス業など、どの業種でも利用しやすいようにすることを目指しています。

2015年版では規格はスッキリと整理され、PDCAサイクルどおりの順番に再構成されています。規格要求事項の項番どおりにマニュアルを作るだけで、PDCAが構築されるだけでなく、運用もしやすく、審査の対応も出来るという、合理的かつ効果的な規格となったようです。ISOが単なる形式だけのものに終わらず、業務そのものに適用され、PDCAを定着させ組織を安定して継続させていくためのツールであることが、より明確になったといえます。

## 2. 2015年版対応マニュアルへの移行ステップ

2015年版では、新たな項目が追加されたり、全く新しい規格要求事項になっている部分もありますが、条項番号や順番に若干の変更はあっても、以前とほとんど変更のない内容も多くあります。移行作業を行う際は、新規に追加された「組織の状況」や「リスク及び機会」

への対応を重視しがちになるかも知れませんが、全体の流れをみて改訂することが望まれます。まずは既存マニュアルの組み替えを行う方法があります。既存マニュアルにおける現状の変更点に関する修正作業から対処していくことでも、規格の変更の意図等を整理

することが可能になります。その意図を理解した上で、新規に追加された項目について、プロセスを整理し明確にしていくことができます。全体の流れから強調すべき点や追加項目に基づく修正を行いながら、変更、追加部分に対応していく方法です。

最後に、明確にした課題やリスク及び機会を考慮に入れて、目標設定や日常管理の指標などと相違がないかどうか、順次改訂マニュアル案に差異がないかどうかを確認し、運用すべき内容に変更していく方法があります。

### 3. 2015年版の運用

今回の改訂により、要求事項が実際の業務の流れに沿うようになったと感じられます。ただし、『なぜこの順序なのか』を理解しておかなければ、効果的なマネジメントシステムの構築は難しいかもしれません。用語一つ一つの解釈だけではなく、全体の流れの中で何が求められているのかを考えることが求められるでしょう。

「要求事項に書かれているから記録が必要だ」と考えるのではなく、「設計が上手くいっているかどうかは確認しないとだめだ。だから記録が必要なんだ」というよう

に、要求事項がなぜ、すべきことと決められているのかを理解していくと、納得のいく運用がしやすくなると思います。



三村 聡 (みむらさとし)

九州大学大学院農学研究科修了。農学修士/CEAR環境審査員/JRCA品質審査員。専門の農業・食品分野を中心に活動。福岡市在住。

#### 事例紹介

特集

2

### ISO9001:2015 ver. 移行審査を終えて

山田建設株式会社  
代表取締役社長 山田 義勝



去る10月24日25日の二日間に渡って2015年度版品質ISOの移行審査を受審しました。弊社は平成12年12月18日に品質ISOの認証を取得して以来16年、2000ver.から2008ver.と改訂の山を越えてきました。ただ今回の改訂・移行はこれまでになく準備もそれなりに必要でした。

現在、多くの組織がISOの認証を取得しているにもかかわらず、正直申し上げて、必ずしも実践に活かしていない組織があると聞いています。今回の改訂はここにメスを入れて、実践に役立つISOにするというのがコンセプトになっているとのこと。確かにマニュアルや管理責任者についても特段の定めもない反面、強いリーダー

シップを求めています。また、企業が抱えるリスクにあらかじめ備えるという予防処置と機会をとらえて、積極的に組織を動かすという視点が加わっています。形式主義を排して極めて実践向きになっており、審査では準備して臨んだにも関わらず、数々の鋭い指摘を受けました。確かに言われてみれば、実に痛いことばかりで、「さすが」と脱帽する一方、終わりのない組織の改善に向けて益々意欲を燃やしている次第です。



審査風景

<http://www.yamadakensetsu.co.jp/>